

---

# 宋元版大藏經研究

---

# 目 次

凡例 vii

<b>序 論 東部ユーラシアの中の「宋元版大藏經」</b> .....	3
第一節 宋元版大藏經研究の基盤資料	4
第二節 宋元版大藏經に関する研究の概観	5
第一項 宋元版大藏經に関する包括的な研究	6
第二項 宋元版大藏經の系譜論とその限界	8
第三節 本書の三部構成と宋元版大藏經の三期区分	10
第一項 「東部ユーラシア史」という視座の設定	11
第二項 本書の三部構成に反映される、宋元版大藏經の三期区分	14
まとめ	23

---

## 【第一部】

### 北宋・契丹の刊本大藏經

#### 北中南三系統の形成

---

<b>第一章 開寶藏——中原王朝の官版大藏經</b> .....	31
第一節 開寶藏の遺品とその分析	32
第一項 開寶藏の遺品	32
第二項 開寶藏の遺品から読み取れる情報	41
第二節 開寶藏雕印の歴史	43
第一項 太祖時代——益州で開板された開寶藏初雕部分	43
第二項 太宗時代——開寶藏の版木の移管・印造	45

第三項	神宗時代以降——印經院の顯聖寺移管とその後	46
第三節	開寶藏の傳播	47
第一項	中國國內における流布	47
第二項	國外への傳播	48
第四節	開寶藏の影響——轉寫と覆刻	55
第一項	日本に傳存する開寶藏の轉寫本	55
第二項	高麗藏の雕造とその底本の變遷	57
第五節	開寶藏の目録と全體構成	61
第一項	從來の諸説とその問題點	62
第二項	開寶藏の構成を伝える根本史料——北宋代の目録と經錄	65
第三項	開寶藏の全體構成の復元	80
第四項	開寶續藏の増補過程	83

## 第二章 契丹藏——北方王朝の官版大藏經 ..... 117

第一節	契丹藏を伝える史料とそれらに基づく先行研究	118
第一項	妻木正良 [1912]	118
第二項	神尾弼春 [1937]	121
第三項	呂澂 [1951]	121
第四項	竺沙雅章 [1978]	122
第二節	契丹藏の發見とその後の研究	124
第一項	山西省應縣佛宮寺から發見された契丹藏印本	124
第二項	河北省豐潤縣天宮寺佛塔の出土品 (1987年)	132
第三項	トルファンやカラホト出土の契丹藏の印本・模寫本	135
第三節	契丹藏のテキスト内容の復原——高麗再雕藏の校勘記を手掛かりとして	143
第一項	契丹藏の高麗傳來	144
第二項	契丹藏と高麗再雕藏	145
第四節	契丹藏の目録と全體構成	147
第一項	房山石經と契丹藏	149
第二項	契丹藏に基づいた『一切經源品次録』	154

<b>第三章 福州藏</b> ——江南の私版大藏經	203
第一節 福州藏の現存状況	204
第一項 東禪寺版の現存状況	205
第二項 開元寺版の現存状況	211
第二節 福州藏の研究史	216
第一項 中国における福州藏の研究	216
第二項 日本における福州藏の研究	219
第三節 福州藏の初雕史	222
第一項 東禪寺版大藏經の初雕史	222
第二項 開元寺版大藏經の初雕史	233
第四節 福州藏の初雕期における問題点の検討	245
第一項 東禪寺版大藏經事業の開始年代について	245
第二項 「崇寧萬壽大藏」の敕賜年代について	253
第三項 東禪寺版と開元寺版の関係	257

-----

**【第二部】**

**南宋・金・モンゴル帝國期の刊本大藏經**

南北二系統の竝立

-----

<b>第一章 金藏</b> ——新たな北方系統大藏經の形成	289
第一節 金藏の現存状況	289
第一項 金藏廣勝寺本	289
第二項 金藏大寶集寺本	293
第三項 近代の影印出版	295
第二節 金藏の雕造史	295
第一項 金藏の初雕期	296
第二項 モンゴル帝國時代の補雕期	313

第二節 現存する金藏の來歴とその底本	316
第一項 現存する金藏の來歴	316
第二項 金藏初雕本に基づいた底本	318
第三項 金藏の構成と目録の復元	319
結 び	321

## 第二章 思溪版大藏經——南宋初期に誕生した江南大藏經…………… 343

第一節 思溪藏の現存状況	344
第一項 日本に現存する思溪藏	344
第二項 中國に現存する思溪藏	353
第三項 日中協力から生まれた思溪藏復刻版	355
第二節 思溪藏の雕造史	356
第一項 現存する刊記の概観	357
第二項 現存する刊記から推察される思溪藏の雕造と補修の過程	364
まとめ	373
第三節 思溪藏の研究史	374
第一項 日本における思溪藏研究の展開	374
第二項 中國における思溪藏研究の展開	385
結 び	389

## 第三章 福州藏——南宋時代における補雕と續雕…………… 403

第一節 南宋時代における福州藏の補雕	404
第一項 『福州東禪大藏經目録』を通して見る福州藏の補雕	405
第二項 福州藏の補雕期——『傳法正宗記』と『輔教編』に着目して	429
第二節 南宋時代における福州藏の續雕	448
第一項 『大慧語録』とその入藏	449
第二項 『首楞嚴經義海』の雕造と入藏	463
第三項 天台教典の歸還と入藏	475
第四項 『大方廣佛華嚴經合論』等、十三函の雕造と入藏	486
結 び	498

---

**【第三部】**
**元代の刊本大藏經**
**南北二系統の融合**


---

<b>第一章 弘法藏として生まれ変わった金藏</b> .....	531
第一節 「弘法藏」の研究史	531
第一項 先驅者たちの主張	533
第二項 議論の錯綜	537
第三項 近年の展開	542
第二節 「弘法藏」とは何か	546
第一項 「金藏」から「弘法藏」へ——世祖朝における大藏經の關連事業	546
第二項 「弘法藏」から「元官藏」へ	557
結 び	560
<b>第二章 元代の江南大藏經——普寧藏の誕生と國內外への傳播</b> .....	567
第一節 普寧藏の現存狀況	568
第一項 日本に傳存する普寧藏	568
第二項 中國に傳存する普寧藏	575
第二節 普寧藏の雕造史	577
第一項 普寧藏の初雕期	578
第二項 普寧藏の修補と補雕	588
第三項 普寧藏の續雕	594
第三節 普寧藏の傳播	603
第一項 普寧藏の元國內における普及	604
第二項 普寧藏の國外への傳播	609
結 び	611

### 第三章 元官版大藏經——南北融合型の大藏經の誕生…………… 627

#### 第一節 元官藏の現存する傳本 628

第一項 謎の大藏經 628

第二項 中國雲南省圖書館所藏の元官藏 631

第三項 日本對馬仁位東泉寺所藏の元官藏 633

第四項 新たに確認された元官藏 634

#### 第二節 元官藏の概要とその先行研究 638

第一項 元官藏の概要 638

第二項 元官藏の先行研究と課題 646

#### 第三節 成篁堂文庫所藏の元代官版大藏經本 655

第一項 「成篁堂本」の概要 656

第二項 「成篁堂本」の性格とその位置付け 658

結 び 663

参考文献 671

初出一覽 711

宋元版大藏經年表 712

索 引 722

あとがき 741

## あとがき

『老子』に「學を爲せば、日々に益し、道を爲せば、日々に損す」という言葉がある。これは、「學問の過程では、一日一日と、知識が積み重ねられていくが、求道の過程では、一日一日と、私欲や雑念などが削ぎ落とされていく」といった意味で受け取られる言葉であろう。しかし、私は、「いかなる營爲も「道」とは無縁でなく、そうであれば、學問を通じて「道」を極めることができるに違いない」と信じている。

この信念に支えられて、宋元版大藏經について、かれこれ十年近く学びながら、研究ノートを積み上げていくうちに、一冊にまとめて公刊することを願うようになった。その理由の一つは、関連分野には初學者向けの入門書はあるが、専門書はまだ少ない、という現状を打開する必要がある、と感じていたからである。しかしながら、雑多とした研究ノートを体系的な専門書にまで仕上げる道程は、決して楽ではなかった。

あまりにも苦しかったので、著書の刊行を断念しようとしたことがある。そこで、師匠に、「こんな基礎研究を續けて本にしても、意味がないのでは」と愚癡を零したところ、「他人に散々苦勞させておきながら、今さら止めるとは、何だ」、「この研究に意味があるかどうかは、君自身が判断することではないだろう」と電話越しに叱られた。師匠によると、私の研究活動は、商店街の中で細々と、だけど毎日休むことなく店を開く豆腐屋さんのようなもので、豆腐屋さんがなくても、世間様は困らないが、逆に言うと、あっても困らないものだそうである。結局、修行を續け、「豆腐作り」を極める以外に、私の道はない、ということだろう。

勉強も語學も、どれ一つ満足にできてきたわけではないが、これまで周りから助けてもらいながら、自分で定めた目標に向かって猪突猛進して、氣が付けば、現在地に辿り着いていた。長年、仕込んできた「お豆腐」が、何とか、仕上がりそうである。この道を進んでこられたのは、時には厳しい師匠の導き、良き先生と畏友に恵まれ、多大な御指導と御支援を頂けたからである。長年に互り御指導下さった栗山明高師（眞言宗豊山派寶光院住職）、諸先生方、學友の皆様に、心よりの感謝を申し上げたい。

また、本書の刊行に際して、株式會社法藏館の今西智久編集長には、企畫の段階から相談に乗って頂き、校正など、諸方面にわたり、御盡力を頂いた。本書に寫眞掲載及び轉載するに当たっては、文化廳、宮内廳書陵部、淺草寺、増上寺、岩屋寺、高山

寺、東福寺、般若寺、喜多院、嵯峨清涼寺、靜嘉堂文庫、町田市立國際版畫美術館、大谷大學圖書館（博物館）、早稻田大學圖書館、京都國立博物館、國際佛教學大學院大學日本古寫經研究所、ドイツ・バイエルン州立圖書館（Bavarian State Library）、中國國家圖書館、雲南省圖書館、韓國中央博物館、湖林博物館等から御協力を賜った。併せて、調査・閲覽に際して、多大な御便宜を圖って下さった各機關・寺院、並びに諸先生方に、厚く、御禮を申し上げる。

最後に、本書は、日本學術振興會科學研究費助成事業・基盤研究（C）「元代官版大藏經の總合的研究と大藏經系譜論の再考」（課題番號：22K00060、2022～2025年度）の助成を受けて進めてきた研究の成果を集成したものであり、同科研費の研究成果報告書を兼ねている。

2026年2月28日

池 麗 梅